

小国町の昔物語について

山形県立小国高等学校 1 年

峰田 祐輔 舟山 拓朗 渡部 恭兵

安達 桃子 色摩 七海 佐藤しおり

1. テーマ設定の理由

私たちはここ小国町に住み生活している中で幼い頃より昔物語や言い伝えなどを聞いてきました。都市伝説といわれる学校の怪談話やその地区の成り立ちなどを話し合っているなかで、地区によって若干異なる部分があるものの、類似する物語などが多く登場することに気がつきました。そのような小国町で言い伝えられている物語に着目し研究テーマとして設定して探っていきたいと考えました。

2. 調査の概要

(1) 昔話収集

- ① アンケートの実施
- ② 地区のものしり名人を探す

(2) 聞き取り取材

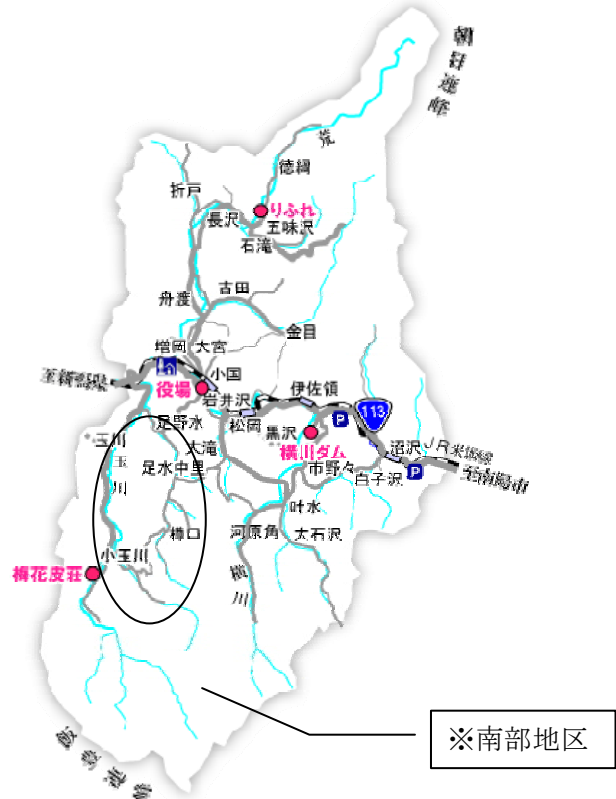
- ① 各地区の昔話をまとめる
- ② 大里峠の大蛇伝説

(3) 現地調査

- ① 関連深いもの
- ② 現地を歩く

(4) 紙芝居制作

- ① 紙芝居を作る
- ② 紙芝居を演じる



小国町地図（小国町役場HPより）

3. 調査の結果

(1) 昔話収集

① アンケートの実施

地区を対象に配布し集計したところ「〇〇で幽霊が出る」というような幽霊に関するものが目立ったものの、肝心な昔話に関しては、祖父母が亡くなったり、祖父母と離れ核家族が多くなった等の理由で、特に有力な情報は得られませんでした。

② 地区のものしり名人を探す

小国町在住で山麓民話の語り部をされている方の本【長者原媼夜話（ちょうじゃはらのばばさのむかし）】を手がかりにその著者である佐藤とよい氏にお話を伺おうとしたのですが、すでに亡くなられていました、近隣の方にお聞きしたところ、詳しくはないにしろ地区の人が覚えているかもしれないという情報から調査地区を小国町の南部地区※に限定し、聞き書きを行い、調査を進めることにしました。

町役場や町教育委員会から地区のものしり名人を紹介して頂きましたが、高齢で話しが負担になるという理由で数人に断られるものの、ようやく了承をしていただける方と出会うことができました。

(2) 聞き取り取材

①各地区の昔話をまとめる。

- ・ 後藤弘子さん（小国町の語り部さん）
- ・ 小島カツさん（足野水地区）
- ・ 島貫一雄さん（市野沢地区）にお話をお聞きしました。

玉川太郎と慶次之助

昔、津川村（現在小国町大滝の丸山）というところに、背は小さいが、とても足の速い慶次之助という若者がおりました。もう一人、玉川に住んでいる玉川太郎という、とても気が短い若者がいました。この2人は、互いに強いばかりにいつもけんかばかりしていて、仲が良くありませんでした。

ある日、二人はばったり出会いました。いつも口が早くて、けんかの種を作るのは玉川太郎のほうでした。「やい、慶次之助、お前はなんと小粒なんだろう。そんな身体でよく豪傑だなんていわれるな。」怒った慶次之助は、「なんだと！お前はバカにでっかいのう！しかし身体ばかり大きくてなんにも役に立たないのう。」こんな事から、またまたいつものとおり、けんかが始まりました。

そして、二人が数時間問答をしているうちに、とうとう取っ組み合いのけんかを始めました。たちまち二人は着物を脱ぎ丸裸で勝負を争いましたが、どちらも無双の豪傑なので容易に勝負はつきませんでした。気の短い玉川太郎は「えい面倒くさい、どちらが強いか見せてやるわい」といってそばにあった大きな石を目よりも高く差し上げ慶次之助に投げつけようと相手めがけて投げました。

慶次之助は「なんだ、こんな石」とひょいと受けてそれを受けるな否や「それ、お返しだ」と小さな体で投げ返しました。玉川太郎はぶんぶん怒ってまた「これでも喰らえ」とふた抱えばかりもある大石を慶次之助めがけて投げつけました。慶次之助は「なんだこんな石」とひょいと受けたが、あまりの大きな石に少しよろめきました。

それでも「それお返しだ」と玉川太郎に投げ返しました。生まれつき、怒りっぽい玉川太郎はカンカンに怒って今度は3抱えばかりの大石を「うん！」と高く差し上げました。それを見た慶次之助は「これはたまらん」と逃げ出しました。「こら慶次之助。逃げるとは卑怯だぞ、まて」と玉川太郎は大石をかかえて後を追いかけてきました。

でも足の早い慶次之助にはとても追いつくことはできませんでした。そうしているうちに二人の間隔は数町離れてしまいました。火の玉の様に怒った玉川太郎は、遙か遠くから大石を力一杯投げつけました。大石は唸りをたてて飛んで、逃げる慶次之助のすぐ後ろで「ドシン」と落ちて地にめり込んでしまいました。

今も滝集落の入口にある1寸5尺程の石が、玉川太郎の投げた石だと言われています。そして慶次之助は丸山の麓にある奥行が百間あろうかという岩穴の中に隠れたので命は助かりましたが、それ以来慶次之助は玉川太郎を恐れてその岩穴から一生出なかったと言われています。その岩穴を「慶次の穴」と呼んでおり、その前には慶次之助を奉った神社が今も残っています。

そして滝集落の丸山の付近には。藤と萩が1本も生えないのは、このけんかの際に慶次之助が穴へ逃げ込むとき、あまりに慌てて走ったので山の中の藤という藤、萩という萩に足をひっかけて全部根こそぎにしてしまったということです。それ以来、丸山には藤も萩も生えないと言われています。

高鼻峠の大蛇の話し（蛇）

小国町から杉沢へ行く街道に高鼻峠があつて、その南口に小阿弥陀という所があります。昔、この田畑一帯を「丸屋」の家号で耕作していました。ある年の春、田んぼで働いている若衆のところへ、女中が昼食を届けに行こうと高鼻峠のヨシ沼のそばを通りかかると、若くとても素敵な美男子な男がいて、「ここで遊んでいかないか」と引き止めました。

女中は急ぐからと言って断ったけれども男は、ちょっとでいいからと言って聞きませんでした。仕方なしに帰りに遊んで行くからと言って逃げようとする男は「約束の印として何か置いていけ」と言うのでした。女中は別に何とも思わないので自分の被っていた豆絞りの手拭いを渡し、すっかり道草をくってしまったと大急ぎで小阿弥陀へ向いました。

弁当を届けた女中は、さっきの約束事をすっかり忘れて沼の側を通ろうとした時、やぶの中に大きな蛇が、さっき自分の渡した豆絞りの手拭いを頭にのせ、とぐろを巻いてぐうぐう眠っているのを見つけました。すっかり驚いた女中は、小阿弥陀まで一目散で逃げ帰り、若衆に今までのいきさつを話しました。それを聞いた若衆は、手に手に鍬や鎌を持って沼にかけつけ、大蛇を退治してしまいました。若衆は、一番近くにある経塚山に大蛇を埋めることに決めたものの、あまりに大きくて運ぶ事が出来ないので、7つに切って背負い上り埋めたと云われています。

現在も経塚山には、その大蛇を祭った社があります。高鼻峠のヨシ沼の主は、夫婦蛇であつたが男蛇が殺された後、女蛇は百子沢のある沼の主の許婚（いいなずけ）に嫁いだという。雨のしとしとと降る夜、蛇の目傘をさして行く大蛇の嫁入り姿を杉沢の人々は見て、その翌朝大蛇の通った道の草が倒れていたと言われています。

五色の大蛇の話し（蛇）

昔、町原の金毘羅山に八木九郎右エ門という豪族が住んでいた。又、松岡の字金右エ門沢の山には九郎右エ門の甥にあたる畠金右エ門という者が住んでいて、長く勢力を争っていた。

ある年の春、畠家の住んでいた山が、七日七晩山鳴りがして地割れをおこし、崖が崩れた。その時山の上にあった畠家の大きな石の祠堂の屋敷鎮守がくずれ落ち、麓に出来た深い地割れの中へすっぽりと入ってしまった。するとその中から五色に輝いた美しい大蛇が現れて、近くの三光田沢へ登って行った。此の沢の奥には、松田の鎮守、福一満虚空蔵菩薩が鎮守しているのでその威光に恐れたのか、大蛇は沢の途中から引き返して、隣の猪沢に入った。

当時このあたりは深い林で、沢水の量も豊であつた。大蛇はこの沢の奥の黒岩滝の下まで登ったが、行く手が高い岩にさえぎられているので、しばらく落ち込む滝水と岩の間に身を隠していた。そこへ、松岡の谷四郎というものが通りかかり、滝壺が異様に輝いているので、不思議に思っ中を覗くと、五色の大蛇が居るのを見つけた。驚いて松岡に下り、大勢の村人を連れて再び来てみると、大蛇は死んで滝壺にさらされていた。大蛇は人に姿を見られたので昇天の術を失い、天に昇って竜になることができなくなったから死んだのであると言われています。村人は、大蛇の死骸を滝壺からわずか下った沢のほとりに葬った。

この事があつてから、谷四郎は発狂してしまい黒沢の沢の中で死んだ。今もその沢を谷四郎と呼ばれ、死んだ後もこの一家には不幸な事ばかり続いたので、大蛇を葬った場所に碑を建て水神様とし祭った。今でも大蛇が死んだ5月5日には、五色の梵天と赤飯を供えてお祭りをする。五色の大蛇が出てから畠家の勢は衰え、金右エ門は八木家の手下に殺されてしまったそうです。

伊佐領の熊の話し（熊）

伊佐領字箱の口集落の南東にある丘に「山の神」神社が祭られています。その近くに、高橋家によって祭られた「熊の神」という石碑があります。これは、その熊の神に伝わる物事です。

昔、箱の口の高橋家の一人が猟人をしていました。このころ熊射ちをする時には、何日も山奥にとどまり熊のいそうな所を、回って歩かなければなりません。ある時、この猟人が集落から相当離れた山奥へ一人で熊射ちに出かけました。猟人が山に来てから三日にもなるのに熊はおろか足跡さえも見つかりません。三日目の日も何の獲物もとれないうちに、その日も暮れようとしていました。「ああ今日もだめか、それでは今夜泊る場所でも捜して、寝ることにするか、くたびれたわい。」と猟人は一人ごとを言いながら、その場に「どっこい」と腰をおろしました。とその時です。突然、カサカサと何かの歩くような、走るような物音を耳にしました。経験から猟人は、とっさに「獲物だ」を悟り反射的に置いてあった鉄砲に手をかけました。猟人は、目をキラキラ光らせながら鉄砲を持って身がまえ、その音のする方向にじっと目をすえていると、何とそれは、今までに見たことのない立派な大熊が目の中の尾根をゆっくりと登っているのではありませんか。猟人は、「これはしめた」とばかり引き金を引こうとした時もことです。自分は鉄砲で狙われていることを感じた大熊は、別に慌てた素振りも見せず、じっと猟人の方を睨みつけました。さすがの猟人も、その目の鋭さには、全身がブルブルと震えだしました。猟人は「何くそ、こん畜生」とじっと睨みかえしました。

その時この大熊は、どうしたことか猟人に見てくれと言わんばかりに両手を挙げてその場に二本足で立ったのです。それを見た猟人は「おっ」と驚きの声をあげてしまいました。それもそのはず、その熊はつま白だったのです。つま白という熊は両手の手の平の部分が真白になっており、当時の人々や猟人仲間では、山の神の使いとして撃つことを固く禁じられていたからです。そしてこの熊は人間には決して危害を加えないと信じられていました。

これを見てしまった猟人はどうしようかと迷ってしまいました。連日の不猟で、いらだっていた猟人に良心が「せっかくの獲物だが、つま白では殺せない。次の獲物を待とう。」と言いました。すると心の中の悪魔が「何言っているんだ。こんな見事な熊を見逃してしまったら二度とチャンスはこないだろう。だから思い切って撃ってしまえ。」と囁きかけるのでした。

良心・悪魔は猟人の頭の中でぐるぐる回るのでした。このような場合、人間はともすると悪魔のいいなりになりそうなものですが、この猟人もその一人でした。「そうだ、今ここでこのつま白を撃ったところで、どうせこんな山奥だ。誰も見ているはずがない。殺してからその場でつま白の部分の皮をはぎ取れば、誰も気がつくまい。」と、とうとう悪魔の誘惑に負け、撃つ決心をしました。鉄砲の引き金に力を入れると「ダーン」と暮れかかった山々にこだまして猟人の撃った弾丸は、見事熊に命中しました。その時撃たれた熊は、一瞬猟人を睨みつけたかと思うと「ウオー」と一声あげるやいなや下の谷川に転がり落ちていきました。

猟人は体をのり出して谷川の滝つぼに落ちた熊を見届けると「これはしめた」と高鳴る胸を押さえながら谷川へ走るようにして下っていきました。

息を切らんばかりにしてたどり着いてみると何と不思議な事に、そこには熊の姿はもちろん熊の落ちた形跡一つありませんでした。ただ澄み切った水が何事もなかったかのように流れているばかりでした。

猟人は半分恐ろしくなって「こんなバカなことがあってたまるものか。この目でしかと見届け

たのだ。」と自分の目を疑うようにして、辺りを何回も見回しました。しかし幾度見ようとも、熊の姿は見当たりませんでした。

その時獵人はある物を見てハッとしました。それはさっき落ちたはずの滝つぼの美しい水の中に、つま白の熊と非常によく似た小さな石が一つコロンと転がっていたからです。恐る恐る近寄って、その石を手にした獵人は、見る見る中に顔の色を失ってしまいました。見れば見るほどその石は、自分が撃ったはずの熊に見えてくるのです。

獵人はヘナヘナとその場にしゃがみ込み「ああ、俺は何てことをしてしまったのだろう。撃っては悪い熊を殺したので、神様がこの石を熊の身代わりにしたに違いない。後できっと祟りがあるだろう。ああ俺はどうすればいいんだ。」と何かにすがりたい気持ちいっぱいぶやくのでした。

しばらくしてこうなったら、いさぎよく神様に謝ろうと自分に言い聞かせ「山の神様、山の神様、どうぞ愚かな私をお許し下さい。私は本当に悪いことをしてしまいました。自分の良心に勝てなかった男です。せめてもの罪滅ぼしに、この石の熊を一生大事に奉ります。そして以後、獵人をやめ熊の肉は一切食べないことを誓います。ですからどうぞ私をお許し下さい。」と何回も何回も同じこと繰り返して深く頭を垂れるのでした。

その翌日さっそく獵人は、その石を持ち帰り、現在の「山の神」神社の近くに埋めて熊の神として奉りました。この熊の神は、石碑が立てられており、高橋家では、今もって年に一度必ずお祭りをしているそうです。

それ以降、高橋家では集落で熊狩りがあってもそれには参加しないで、集落でとった熊も家の中では絶対食べないということです。代々そのように伝承されてきたからであり、いまだに高橋家にこの伝説が信じられているからです。

長者原の大蛇の話し（蛇）

（三角山）別名（雨乞い山）の麓にある長者原は、今でこそ人が住み米の実のなる田んぼが多くあるが、その昔は大きな大きな沼だったそうです。

その池は限りなく深く、青黒くよどんだ水の中からは時々白い角を持つ大蛇が頭をもたげ、里人からは「沼主」と恐れられていました。

その辺にはよし草が茂り、苔のむした大岩がゴロゴロ横たわり、誠に気味の悪い事はこの上なく誰一人として足を入れたことのない所でありました。

里人達が最もこの白い角を持つ大蛇を恐れるのは、秋の取り入れの時です。里人がせっかく苦労して実らせた稲に、ごろりと横のなって昼寝をしたり又、昼寝から目をさましては人家に頭をつっこんで家ごと持ち上げたりして遊んでいたのです。

遊び疲れて腹をすかすと、こんどは手当たり次第に赤ん坊や子供を飲み込んでしまい、とにかく里人達はおちおち仕事をしている事ができませんでした。

ある時どこから来たかわからないが、（小玉川）へ行くという旅人が一人道に迷ってこの沼のあたりを歩いていました。するとこの沼の主、白い角を持つ大蛇が十重二十重にとぐろを巻いて昼寝をしているのにぶつかりました。

すっかり驚いて逃げようとするや、旅人を丁度目を覚した大蛇が、昼寝後の腹ごしらえとばかり猛然と襲いかかりました。

肝をつぶして驚いた旅人はもうだめだと思い、日頃信ずる飯豊権現様にせめてもの御祈りをしようと手を合わせて目を閉じました。

すると不思議なことに大蛇は襲いかかるのをピツタリとやめ「オレは生まれながらにしてタバコのヤニが嫌いなのだ。お前を助けてやるからこのことは誰にも話すなよ。もし話せば命はないぞ。」と言いそのまま沼の中へゴボゴボと入ってしまいました。危い身をのがれたのも飯豊の権現様のおかげと後に1週間山に籠り、社の土台を直してやったそうです。

旅人は道々を考えて、

「こんな恐ろしい大蛇が住んでいる限り世の中の人々は幸せに暮せない。」と思い、今大蛇に聞いた一番嫌いな物というタバコのヤニのことを小玉川の村の衆に語って聞かせました。

小玉川にはそのずっと昔から腕ききの狩人が十13人も住んでいて、

「何とかして大蛇を仕とめたい。しかしただ弓を射て、まともに向かっただけでは敗けてしまう。何かいい方法はないものか。」

と手ぐすねひいていた。旅人からその話を聞くと、「しめた」と思い、

「よし、ひとつオレ達はその白い角をもつ大蛇を退治してやろう。」ということに決まりました。

そこで13人の狩り人達は、タバコのヤニを沢山背負い勇んで村を出発しました。沼の辺に着くと、さっそくたき火をして待つこと一昼夜、沼の水面は相も変わらず青黒くよどんでいました。

ついに、七日七晩交代で寝ずの番をし、今か今かと待っていました。そしてその7日目の晩に、突然ガボガボと水面を割って沫を上げ白い角をふりたてた大蛇のかま首がガッキと持ち上げられました。

それとばかり13人の狩り人は、タバコのヤニのベツトリついた矢をつがえ、きりきりと弓を引きしぼり一勢にヒュツと放ちました。さすがに白い角をもつ大蛇でも、13人のしかも一番嫌いなヤニのついた矢を射こまれたのではたまったものではなかったのです。

金目のにわたりの話し（鳥）

昔、金目集落は、天候に恵まれ、人々はたいへん一生懸命働いたので毎年豊作が続きました。

このような幸福な生活を長い間送っていましたが、ある年のある日の事です。突然あたりが暗くなったかと思うと、ものすごい大雨が降り出しこれが何日も何日も続きました。この悪天候のために、その後虫やうじがわき出し、それが原因で悪病がはやり出しました。

人々は苦しみもがき、働くことが出来なくなったために農作物が全然取れなくなって、人々は、困り果てた末に家宝であるものを持ちよって神様にそれを奉納し幾度も拝みましたが何の効果もありませんでした。そしてその年はとうとう凶作で暮れてしまいました。

食べ物がないために、老人や子供達は、次から次と餓死するありさまでした。そうしたある日、目も開けていられないほど西の空が黄金に輝いたかと思うと、そこには一羽の美しい黄金のにわとりが現れました。村人達は、あれよあれよと空を見守っていました。

その美しいにわとりは、突然集落に舞い降りてきて、今まで非常に多くはびこっていた、うじや他の虫を食べ尽してしまったということです。

そのため村人の病気はすっかり回復し、人々は以前の幸福をとりもどしました。集落の人達は、これはまぎれもなく金色のにわたりのお陰であるとし、それから後に神として祭りました。

金色のにわとりが集落全体を救ったのだと信じられ、当時は金目ではにわたりの肉や卵を食べなかったとされています。

しかし集落以外の他からもってきた卵は食べても良いとされています。その時奉ったにわとりを描いた掛け軸が今でも当集落のどこかの家に家宝として残されているとされています。

しめじの話し（山菜）

昔、小国の国蔵様を通る道（現在では松岡を通る道）をさらに奥に進むと山の麓に三軒の家がありました。その中の一軒の家には、とても親孝行の息子とその母親の二人が貧しいながらもたいへんつつましく暮しておりました。

ところがある日、突然その家の母親が、今までの苦労が重なり倒れてしまいました。息子は必死になつて母親の看病をしましたが、容体は良くなるどころか日増しに悪くなるばかりでした。

息子は心配で夜もろくに寝ないで、つきっきりであつかいました。そのため、家には食べ物らしいものは何もなくなってしまい、困り果てた息子は、近所に食べ物を少しでいいから分けてくれるよう何度も頼みましたが、親切に与えてくれる人は誰一人としてありませんでした。

かねがね息子は、山の奥に行くと沢山の茸の出る場所があることを聞いていました。しかし、その場所は、村人達の噂によると大きな角のある白い大蛇が常に横になって寝ていてその場所に近づくと大蛇に食われてしまうと言われていました。

誰もが大蛇を恐れてその場へ近寄りませんでした。息子は、「このままの状態でしたら二人とも餓死してしまう。けれども、そこへ行けば大蛇に食べられてしまう。ああ、私はどうしたらいいのだろう。」と一人で迷っていました。

さんざん考えた末に、自分は何も食べなくとも、せめて病気の母親に食べさせないといつになっても病気は治らないと、息子はついに大蛇のいる場所に茸を採りに行くことを決心しました。翌日、まだうす暗いうちにこっそりと家を出ました。どこまで歩いてもその山は見当らず、半分あきらめに似た気持ちでとぼとぼと歩いていたが、腹の空いたのも手伝ってとうとう歩けなくなり、その場にしゃがみ込んでしまいました。日は遠慮なしに暮れようとし、その美しい夕日だけが息子を慰さめるかのようにいつまでも輝いていました。息子は母のことを気づかいながらもその美しく照り映えた夕日にじっと見とれていました。

しばらくして息子は、何の気なしに足元に目を落してびっくりしてしまいました。何とそこには、一面にじゅうたんを敷いたかのように、見事な茸がいっぱい生えているではありませんか。今までの疲れはどこへやら、息子は息をはずませながら一生懸命に採り続けました。

そのうちに手元が暗くなり気づいてみると日はとつぷりと暮れてしまい、家に帰る道さえわからなくなってしまいました。

息子は「こんなにたくさん採ったのに家に帰れなくなってしまった。お母さんは心配してるだろうなあ」といいながらどうしようもなく、そこに野宿する事に決めました。

くたくたに疲れて寝たものの母を心配するあまり夢を見ては幾度となく目を覚まし眠れないままに夜を明かしてしまいました。「さて今日はもう少し採ってから暗くならないうちに帰ろう」と思いながらまた上った時、驚きの声をあげてしまいました。

目の前に列を作って大きな立派な「しめじ」が自分の目を疑うほど沢山生えていたからです。息子は、今までの茸を捨てこの立派なしめじを採れるだけ採って大喜びで家に帰りました。

早速親にその茸を食べさせました。母親は涙を流して我が子に感謝し、病気もすっかり良くなって親子そろってささやかながらも、幸福に暮したと言われていました。

村人の見た白い角のある大蛇とは、この立派な茸の群れだったのです。

神様はこの茸の群れを村人には大蛇に見えるようにして親孝行の息子には茸のある場所に導いてくれたのだと言われていました。

石ませの話し（馬）

昔、山また山に囲まれた金目集落の夜の出来事。夜もふけ集落中が寝静まった頃、集落の一人の若者が、せっせと夜仕事をやっていました。仕事を終った若者は「どれ仕事もちょうどきりがついたから寝るとするか。」と一人ごとを言いながら、戸締りをしようと外に出た時です。若者は、なにげなく満月の光に照らされた集落の近くの山に目をやった時、突然その山の裾を、ボーと幻のように一頭の白馬があらわれました。「おや？何だろう、今頃の時刻にまさか、夢なのだろうか」。と不思議に思いながら幻のように現れた白馬をじっと見ていると、今度は、幻のようにボーと消えていくではありませんか。若者は驚きました。「これは、どうしたことだろう、白馬が現れたり消えたりして・・・」と薄気味悪くなってきました。しかし、人間というものはこうなると、その正体を知りたいがるものでこの若者は一層その事に興味が出てきてその附近をじっと見まわしていました。すると今度は、さきほど山のそでで幻のように消えた、あの白馬が山の頂上にボーとまた幻の如く現われてきました。そして、じっと集落を見下ろしていました。さっきから見ていた若者は「これは何ちゅう事だろう、白馬が山の下に現われて消えたと思ったらこんどは山の頂上に現われて、そしてこっちを見てやがる」と一人ごとを言いながら見ているとボーと白馬は幻のように消えて見えなくなりました。若者は、今度はどこに現れるのかとあちらこちら見まわしたが、その晩は現われませんでした。

次の日若者は昨夜の不思議な出来事を、村の人々に話しましたが、村人達は「夜の夜中に白馬が現われて消えたと思ったら、山のとっぺんに現われるなどとてもない。おまえは寝ぼけて夢でも見ていたんだろう、人を驚かすにもほどがある」と誰一人として信じてくれる者はありませんでした。だれにも信じてもらえなかった若者は、「そうだ、もしかしたらまた夜になると現われるかも知れない。」と次の晩から夜が更けてくると、じっと集落の近くの山々を見まわしつづけました。

次の日も次の日も、しかしついに白馬は現われませんでした。そして数日たって、また満月の夜、若者はじっと山を見ていると、最初の晩のようにボーと白馬が現われてきました。消えては現われ、現われては消えながら、じっと集落を見下ろしていました。若者はその白馬を見ながら「やつめ、満月の晩になったらまた現われたな。あいつの正体は一体なんだろう」とつぶやきながら見ていると、その馬は突然大声でいなくなりました。すると集落に突然不思議な事がおこりました。というのは今の一声で集落に飼ってある馬という馬が突然狂ったように動き出し、馬屋から飛び出す始末です。

そして狂ったように飛び跳ねながら、さきほど音のした方へドッと走って行くのです。若者は「こりゃどうしたことだ、集落中の馬ちゅう馬が、みな走っていくじゃねえか。」と驚いて見ていると、今度は、山の頂上に幻のように現われた白馬が空を飛ぶように山を下ってくるのです。

さあ集落中はハチの巣をつついたような騒ぎです。「おらの家の馬が逃げたよう」「おらの家の馬だあ」「あっちへ行っただぞ」「そら、山の上からおりてくる白い馬に向って走って行くじゃねえかあ」と集落中の人達が外に出てきました。

小屋から逃げた馬どもは、山から降りてきた幻の白馬を先頭に狂ったように田畑かまわず集落中をかけ走りまわりました。集落の人々が見ている中を一晩中走りまわり、夜明け近くになると、今まで先頭になって走っていた白馬がボーと消えていきました。

するとどうしたことか、今まで狂ったように走りまわっていた馬々は、何事もなかったような

顔をして自分の家に帰って来たのです。さて次の日集落の人々は大騒ぎです。夕べの白馬のおかげで田も畑もめちゃくちゃになってしまったのです。「ああ、せっかく実ったのに、相当だめになってしまった。」という声があちらこちらで聞かれました。それから後の満月の日も幻のような白馬は現われ集落の田畑を荒らしまわりました。集落の人々は、満月の度にこんなことが続いては、とんでもないことになってしまうとさっそくみんなで相談しました。その結果、いつもの馬が暴れて走りまわるところに石をならべて「ませ」を作ろうということに決まりました。次の日から早速その工事にかかり大きな石をならべて「石ませ」を作りました。

それ以後集落はこの幻の白馬からの害は免れ、再び平和がやってきました。そして、それ以後この石で「ませ」を作った場所を誰からともなく「石ませ」と呼ぶようになったと言われていいます。尚、現在もこの「石ませ」には大きな石がごろごろして、歩きにくなっているそうです。

(市野沢・足野水の歴史より)

市野沢のかじかの話し（魚）

小国町市野沢地区に盛残川という川があります。

昔から、盛残川のかじか（川魚）は片目がつぶれている、と言い伝えられて来ました。なぜかじかの片目がつぶれたか、それにはさまざまな由来が語られています。

かつて、八幡太郎義家がこの地で戦ったことがありました。その時、戦い不利となった八幡太郎義家の軍はただひたすら逃げなければなりません。当時この地方の山や野はあまりにひどい藪で、容易に逃げることはできませんでした。そのため、義家の軍はこの盛残川に沿って逃げ上ったと言われています。この川に沢山住んでいた、かじかは、その際沢山の馬の脚に踏みつけられた為、とうとう片目を失ってしまったということです。

また、次のようなことも言われています。

やはり同じ時、八幡太郎義家の家来が川岸を歩いていて、1匹の大きなかじかを見つけました。彼はそのかじかに非常な興味を感じ、おもしろ半分にやりの石づきでかじかを刺しました。石づきはかじかの片方の目をついてしまいした。ところがこのかじかは、かじか仲間の大将（パパカジカ又はオバカジカというそうです。）だったのです。家来のかじか達は大将かじかが、片目になっのを大そう悲しみました。そして家来のかじか達は残らずこの大将に従って片目を落としてしまったのでした。今でも片目のない、かじかがいるのはこのためだということです。

また、このかじかについて別の言い伝えがあります。昔、源頼朝に追われた源義経が奥州に逃げて来た時でした。義経はこの盛残川を家来の弁慶と共に上ったのです。この時弁慶が手に持っていた、やりの石づきで面白がってかじかの片目をついたのだそうです。この川のかじかの片目がつぶれたのはこのためだとも言われています。

ネコまたの話し（猫）

「ねこまた」というところは、手の子と間瀬の間にあります。そこにはこんな話が伝わっています。昔、そのねこまたに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。ある晩、手の子で芝居があるというので、おじいさんは見に行きました。おばあさんは1人で留守番していましたが退屈になったので、かたわらにいたネコに「じっちゃ（爺さん）は今頃、なんぼ面白がっていたんだか、なあ、三毛。」すると、ネコがおばあさんに、「ばっちゃん（婆さん）、今、じっちゃ見ている芝居とおんなじことして見せっから、誰にもゆわねでくれよ。（言いなさんな）」と念を押して、今おじいさんがみている芝居と全く同じことをして見せました。驚いたのはおば

あさんですが、誰にもいわないことをネコと固く約束しました。次の日、おじいさんが帰ってきて、その芝居の面白かったことを、おばあさんに教えようと思いました。ネコとの約束を忘れたおばあさんはその芝居はこんな芝居だったのではなかったかと言ってネコに聞いた芝居の内容をうっかり言ってしまいました。おじいさんはびっくりして、おばあさんにどうしてその話を知っているか聞きました。ねことの約束を破った事に気がついたおばあさんは初めのうちはしゃべりませんでしたが、おじいさんに問いつめられ、ぼつりぼつりと話し出し全部しゃべってしまいました。その時ネコは、天井で目を光らせこれを聞いていていました。そして大雨の降るその晩、おばあさんは、ネコにかみ殺されてしまいました。おばあさんの葬式の時も、大嵐でした。

ネコは、大きな化けネコになっておばあさんの入っている、棺おけをさらっていつてしまいました。それ以来、落合いのネコまたの葬式の時は、いつも雨が降るということです。

サルが城のサルの話し（猿）

飯豊山麓、長者原の「サルが城」には、その名の通り何千匹ものサルが群れが遊んでいた頃がありました。

ある日、村の子ども達が、大勢で川原に行き、「誰か1人地蔵様になんぜ。（地蔵様ごっこ）」と言って遊んでいました。

そうしているうちに、地蔵様になって立ち続けている子供の事を、そのまますっかり忘れてしまいみんな家に帰って行きました。

まもなく「サルが城」に住むサルが大勢つれだって遊びにやって来ました。そして、「おや、ここに地蔵様がいる。」とさっきから立ち続けていた子どもを見つけて言いました。サル達は、ずっと前から、自分達も人間の様に地蔵様がほしいと思っていたので、さっそく藤づるでかごを作り、それに乗せて連れて行きました。

川をかついで帰る時、「サルの尻ぬれても地蔵様ぬれんな（濡らすな）。つんつくつん。つんつくつん。」面白いふしをつけて何回も歌いながら行きました。

サルが城に着いたら、サル達は小屋をかけ、地蔵様になった子供を置き、山からいろいろな珍しい果物を取ってきて、それでサル料理を作って与えました。「地蔵様よ。また川遊びに行ってくるから、るす番しててくれよ」といってサル達は再び川に行ってしまいました。

みんな出かけた後、地蔵様になった子どもは、目の前に与えられたサル料理をすっかり背負って家に逃げ帰りました。「おれ、サルが城さ行って、地蔵様の真似したら、こんなにいっぱいサル料理もらって来た。」といて、近所の子どもたちみんなに見せました。そうしたら、「おれがこんど地蔵様になる。」と欲の深い子どもの1人が言い、地蔵様になりきっていると、やっぱり山からサル達が大勢連れだってやって来ました。「あらあら、おら家の地蔵様、水あそびに来た。早く連れて行け」と言いサルが城に連れて行きました。

川を渡る時、「サルの尻ぬれても地蔵様ぬれんな（濡らすな）。つんつくつん。つんつくつん。」と、面白いふしをつけて歌いながら行きました。それを聞いた欲の深い子どもは、自分が地蔵様の真似をしているのをすっかり忘れてしまって、くすくすと笑ってしまったのでした。サル達はこれを見て、「こんなもの、生き地蔵の、にせ地蔵だ。」と、バリバリひっかいて、川の中にドボンと投げてしまいました。

サル達は、こんな事をして毎日遊び暮したものだそうです。

サルが城の中腹には、その昔サルの頭が住んでいたという大きな岩穴が今もあるそうです。

百子沢の大蛇の話し（蛇）

「百子沢」という地区には、その頃、家が百戸あったと言われています。今でこそ百子沢と書きますがその昔は「百戸沢」と書いたそうです。そこに、たいそう意地の悪い、今で言えば、ガメツイ庄屋の旦那様がいました。その旦那様が、ある時、越後に用足しに行った帰り道、「金丸」という所まで歩いていきますと若くて綺麗な一人の娘に出会いました。

「どごさえぐ？（どこに行くの？）」と聞くと「どごさえぐにもあてのない身だ。おれの父親も母親も死んでしまって、今では身寄り1人なくなってしまった。何とかして下さい。」と答えました。「ほんなら、おらの家さ来て、下女になって稼げ。」と旦那様はその若くて綺麗な娘をつれて帰りました。お花という名前と呼ばれるその娘は、たいそうの働き者でもう村中の評判になりました。

ところが、ケチな旦那様は身よりのないお花を救ったという恩をきせて、1文の給料もやろうとはしませんでした。むしろ、村の人々の評判を気にして、お花を憎むようにさえなったのです。

ある日、旦那様の庄屋に殿様から使わされた役人の客がやって来ました。その時、家宝にしていた南京焼きの10枚1組の皿を出し、お花に盛りつけをさせ、役人を接待したのです。夕方家宝の皿をしまう時、だんな様は10枚のうち1枚をそっと隠してしまいました。お花が、いくら教えても9枚しかないことを旦那様に告げると、主人はもうかんかんに怒って、それから毎日、お花を今まで以上にこき使うようになりました。

皿を洗う時、その1枚を池に流してしまったものと思っている正直なお花は、旦那様のひどい仕打ちにも口答え1つしないですとめしました。しかしあまりの辛さ、悲しさに、お花は、とうとう皿を洗った他の中へ身を投げてしまったのでした。旦那様は、池の前に2つ並ぶお花の草履を見つけ、ずいぶん驚き、慌てましたが、今さらどうすることもできません。村中の若者を頼んでお花の亡がらを探しましたが、そんなに大きい池でもないのに、不思議と見つかりませんでした。その後、毎日夕方になると、「ひとつ、ふたつ、みつつ・・・このつ、とおの皿がない。」

というお花の皿を数える、もの悲しげな声が聞えるようになったのです。その声を聞く者の胸は、まるで切なくかきむしられる程だったと言います。そして、1週間それが続いた時、他の水がざわざわと騒ぎ、がばっがばっと池の淵が欠けていくようになりました。2日も経つと、旦那様の家は、他の中にぐらりと傾き、ついにめりめりっという音と共に全部沈み去ってしまったのでした。それから、夕方になる度にお花の皿を数えるうらめしい声が村中にひびき渡り、池は相変わらず、がばっがばっと欠け続けたと言います。百軒あった村はその全部が池の中に沈み、大きな大きな沼となった池には時々、直径50センチ程の丸太のような蛇の遊ぶ姿がみられるようになりました。その後、その大蛇は自分の棲家をいつか機会があったら海に移そうと考え始めました。

宝暦七年（1757年）5月27日、3メートルを越える大洪水が起り多くの人々を混乱させたことがありました。「足水川」のほとりもその例にもれず、あたりの田畑がすっかり水びたしになってしまいました。その時、足野水の三次というじいさんが、水の心配をして、家の前にたたずんでいると、足水川の上流から、大きな丸太が1本流れて来るのを見つけました。あれあれと思っている間に目の前に来て、突然ぐにやりとくねったかと思うと、がばっと大蛇のかま首が持ち上げられ、そのまますうっと下流に去ったということです。その後、百子沢の沼は自然に埋まっていき、今では、家も相当に立ち並ぶ集落となったそうです。しかし「大沼」と呼ばれる沼だけは今でも残っています。

この話しは（金儀右エ門氏）の書いた「小国歴史伝説集」によると（百子沢の大沼）と題して次のように書かれています。

百子沢の大蛇の話し（蛇）小国歴史伝説集より

昔（南小国村百子沢）の成金持の家に、お花という女中がいた。お花はいくらきれいに髪を結って寝ても、夜中になると一人で髪がほぐれ、そばの障子ほどにサラサラと這い上る不思議な病気があった。

ある時、お花は、家の宝である南京焼きの10枚そろいの皿を洗っていると、あやまって1枚割ってしまった。お花は、主人の厳しい叱りを受けるのを嫌って流し尻の池に身を投じて死んだ。

ところがその夜、池のほとりから、ガラガラと土が崩れて、家も屋敷も一夜の内に大きな沼に化してしまった。これが（大沼）である。

こんな別説もお聞きしました。

お花は大変美しい女中であつたので、主人が惚れ込んでしまい、いろいろな手をつくして、お花を我がものにしようとしたが。何としてもきかないので、ある時、お花に家宝の南京焼きの皿を洗わせ、その中の1枚を主人が隠して、そしてお花に「お前が盗んだに相違ないから、皿を返せ、それができなかつたら俺の妻になる事だ。」と責め立てた。いくら責められても、お花にはそんな皿を返せるはずはなく、又主人に身をまかせることは死ぬよりも嫌だったので池に身を投じてしまった。すると、お花は蛇体になり、家屋敷を沼にしてしまった。

百子沢は非常に沼が多い場所で、昔は48の沼があつたと言われています。中でも一番大きいのが大沼であつたようです。

まとめ

地元の方の協力を得て様々なお話しを各地区の方からお聞きすることが出来ました。その中で、小国町在住で置賜地区を中心に語りべをされている後藤弘子さんには、実際に【語り】を披露して頂き、昔の生活風景を想像できる楽しい話や蛇に関するおどろおどろしい話など、お聞きしました。内容もさることながら、つい引き込まれる巧みな話術に驚きました。登場人物やナレーションも一人で声をかえるなどして話します。不思議なことに紙芝居のように絵がなくても背景が想像できました。紙芝居とはちがい背景は個々の想像に任せるので自分の思い出の場所や印象的な場所などが登場し構成される分、印象に残りやすいのではないかと思います。

また、動物、特に蛇に関しての話が多数あつたことが印象的でした。その中でも大里峠の大蛇の伝説は多少の違いはありましたが、皆さんがご存知でした。



②大里峠の大蛇伝説

i. 大蛇伝説に関して詳しくお話を伺う

山形県側からの大里峠登り口である玉川地区にお住まいの渡部競さんにお話を伺う。

大里峠の大蛇（小国側の言い伝え）

昔、越後女川村の今の蛇喰（じゃばみ）に忠蔵という獵人がおった。忠蔵は奥山の阿古屋谷という所で、木天蓼（またたび）を燻し、その香りを慕ってくる大蛇を鉄砲で撃ち獲って生計をたてていた。大蛇の肉は三年以上漬れば立派な食料になるのであった。

ある日、忠蔵の妻のお里乃が家人の留守に夫の戒めを犯して、大蛇の塩漬の味を見ようと三年経たないうちに桶から少し出して食べてみた。するととても美味しくてやめられず、遂に桶一桶食べ尽してしまった。そのうちにひどく喉が渴いてきたので、流しに行きひしゃくで、水を飲んだがいくら飲んでも飲み足りないの、外に出て堀の流れに口をつけて水が涸れる程飲んだ。それでもまだまだ渴きがとまらないので、ついにお里乃は大川に這入って息もつかずに水を飲み始めた。それを見つけた村人は、お里乃が気が狂ったというので大騒ぎになった。

そのうち空が俄かに雲ってきて、大雨風が起り、黒雲が舞下がってお里乃の体を包んだかと思っただけで、お里乃は蛇体になって雲に乗り、天上遥かに飛び去って行った。忠蔵はその後人々に暇を乞い、髪を剃って巡礼となって旅に出た。お里乃は関谷と小国との境の大里峠に棲みついた。それからは、時々人里に出て農作物を荒したり家畜を取ったりした。又、山に働いている樵夫や、峠を越える者等が大蛇に毒気を吹きかけられて体が煙のように消えてしまった等というので、近郷の物は誰一人として恐れない者はいなかった。

こうなっては神様に頼る外ないと、関谷の者は老人も若人も鎮守の前に集って、七日七夜の祈願を行った。満月の夜のことである。小国の方から大里峠を越える一人の盲の法師があった。この法師は柏崎の生まれで、蔵の市という者であった。山路で疲れたので、頂の辺りまで来て岩に腰を下して休んでいたが、何時の間にか眠ってしまった。目を覚めた時はもう真夜中の頃であった。法師は余り淋しくなったので背負って来た琵琶を取り出して弾き始めた。その美しい音色は静かな山に響きわたった。しばらく弾いていると、法師の前にうら若い声がした。「なんと美しい琵琶の音でしょう。私はさっきから聞き入っていました。」意外なことに法師は驚いて、その女を、「何者であるか。」と尋ねると、「私はこの山に住んでいる大蛇です。普通は岩穴に隠れています、身を現せば幾つもの峰を巻き、谷という谷を埋め尽してしまします。今はこの山も狭くなったので近いうちに荒川を堰止め関谷郷は勿論小国郷までも泥の湖にして住もうと思っています。あなたがもしこの里の人でしたら早く里の外に移りなさい。私は何より好きな琵琶を聞かせてもらったので御礼に教えてあげたのですが、このことは里人に行って決して話してはなりません。若し言うことにそむくようなことがあったらあなたの命はないでしょう。」と言った。その時法師は又訪ねた。「あなたは今何よりも琵琶が好きだといいましたが一番嫌いなものは何ですか。」「鉄が一番嫌いです。蛇の身に鉄ほど毒なものはありません。」と言って女はどこへともなく去ってしまった。法師は、我が身一つより多くの里人を助けなければならないと、山を下って村長に昨日のことを語り、大蛇退治の方法まで教え又鎮守の前で姿を消してしまった。その後には、携えていた琵琶と杖だけが残されていた。そこで村長は四里四方に御布令を出して、鍋釜といわず鉄気のものは何でも残らず持参させ、俄に鍛冶屋を建てて鉄の杭を沢山作らせた。それを村の屈強な者にそれを持たせて大里峠に登り、山中にそれを打込んだ。大蛇は一番の毒である鉄の杭を刺されたので、地を震わし、山を鳴らして苦しみ出し、七日七夜苦しみ続けたが。つ

いに息を絶えてその振動が静まった。再び山に登って見ると、大蛇の死骸は大里峠の山を7回半まいていたという。人々は山に火をつけてその死骸を焼いた。大内淵は尾打淵から変化したものであり、大蛇が死ぬ時に苦しんで尾を打振ったために、掘られて淵になったものだという。里人はこの災害から救われたのも偏にあの法師のおかげによるものと感謝し、琵琶と杖を法師の御しるしとして関谷村も鎮守に合祀し、蔵の市の字を取って大蔵神社と称した。殺された大蛇はその後しばしば大里峠を通る者に祟り、突然大嵐を起こしたり、山鳴りをさせたりするので、峠の上に石碑を建てて大里大明神社として祀りその霊を慰めた。大里峠を掘ると今でも蛇骨が出るそうであり、それは傷薬になると言われている。

一方関川側の言い伝えはこのようなものでした。

大里峠の大蛇（関川側の言い伝え）

女川村の蛇喰村（じゃばみ）にお里という女が居りました。子どもはなく、夫は猟師をして生活をつないでいた。ある日夫は大蛇を撃ちとってその肉を甕（かめ）に味噌漬けにし、当分の間この中を見てもいけないし、食べてもいけないとお里に注意し地中深く埋めてしまいました。3年経てば立派な食べ物になるからです。ところがお里はその中身が何であるか夫から知らされてはいませんでした。見るな、食べるなど言はれれば見たくなるのが人情です。夫の留守に、あれほどかたく注意されたにもかかわらず、見たさについ地中から掘り起し中をしらべると肉の味噌漬だった。香りもよいので一切焼いて食べてみた。ところが、今迄食べたことがなかったほどのすばらしい肉の味だったのです。気づいてみるとかめの半分くらいもなくなっていました。だのがどがかわきしようがありません。小堀に口をつっこみ飲みましたが、これで沢山にはなりません。すぐ近くの荒川に行きがぶがぶのみました。ふと我にかえり水面にうつった自分の姿を見て驚いてしまいました。自分が蛇に変わっていたのです。お里は家に帰ることができなくなり、大蛇となって、今の蛇くずれを上り大里峠付近の山に横たわりました。7つの山をかこむ位の大きな長い体になってしまいました。今の大里峠に住みついたわけです。ある夜、盲の法師が小国の方から大里峠を越えようとのぼってきました。頂上付近の木の側（木の穴のあいた所）に腰をかけ一休みしました。さびしまぎれにシャミをひきはじめました。真夜中になって、きれいな声の女が近づいて話しかけました。「あまりシャミが上手なので聞きに参りました」と、法師といろいろな話しをし、いつか自分の身の上話をしていました。最後に他言はならぬとかたくいわたし、もし他言したら貴方の命はないばかりか、この辺一帯を水の海にしようと言って立去りました。やがて法師は下関の渡辺三エ門方に立寄り、その話しをつたえました。そこで大蛇退治をする相談になり、かじ屋敷で鉄棒をつくり、これを山に打ち込み大里の大蛇を退治しました。法師も死んでしまいました。法師のシャミと杖は大蔵神社に本尊様となりまつられている。付近では蛇骨（蛇石）と呼ばれるが石膏石が採取できるそうです。蛇石はあかぎれの薬になるといわれています。米沢方面の人々には効きが良く、関谷方面の人々には大蛇を殺した祟りで効用がないと言われています。

また次のような説もありました。

蛇喰（じゃばみ）に忠蔵と言う炭焼きが住んでいた。忠蔵は阿古屋谷にいた大蛇を斧で殺し、持ち帰り”みそ漬け”にしてしまう。翌日、忠蔵が出かけたあと女房の”おりの”がこれを見つけ、それを全部食べてしまった。猛烈にのどが渴いた”おりの”は大量の水を飲み、自らも大蛇になって女川を上っていった、おりのが大蛇になったことを知った村人は、夫の忠蔵と娘の波（なみ）を捕らえ、荒縄で縛って女川に投げ込み、殺してしまったという。



琵琶法師”蔵の市”の碑



蛇喰村にある、おりのの碑



蛇骨（繊維石膏石）

以上の言い伝えには所々相違点が見られます。特に気になったのは、蛇を塩漬けにした部分です。関川村（新潟県側）では味噌漬けとなっています。調べていくうちに本町地区にこんな話があることがわかりました。

（小国郷・本町地区の伝説集）より

小国の村夫

草刈りに行った小国の村夫は、あっちの山こっちの山と歩き回って、ふと一本の細道を歩いていくと道の真中に松の木のようなものがあつたので、近寄ってみると、毒蛇で背には黒い銅銭の模様は確認出たが、頭と尻尾は、藪の中なので長さは分からなかった。3～4尺の木を鎌で切って「えい、この憎い奴」と力一杯に叩くと藪の中から頭をもたげ、その頭は祭獅子ほどあつた。両耳が高く突き出て、目には金がたたえてあるようで、口からは盛んに毒気を吐き出していた。彼はいまこそと頭を力一杯叩いてやろうとしたが、その頭を見てすっかり気が抜け、どうせ蛇のほうが早いに決まっている。こうなれば、と棒を持ち直して打ってかかり、ぐったりとしたところを大石でとどめをさしたときに、越後から山師がやって来て、これを見て見世物にするといって塩漬けにして持っていった。

保存する場合、やはり塩漬けや味噌漬けを思い浮かびましたが、特に海岸を持つ羽越では塩が身近で、四方を山に囲まれた小国では豆から作る味噌が主流と思われたのですが、逆になっているのは疑問でした。詳しく聞いてみると小国でも味噌漬けと聞いている人もいて言い伝えそのものが不確かでした。当時は村の外に行く機会が少なく（特に大里峠は関所もある羽越国境でもあり容易に行けなかったこともあり）隣村の情報も乏しく、互いの隣村のこうだろうという思いを互いが話していたのではないかと考えたものの、もう少し詳しく調べる必要があると感じました。



左上：渡部競さんにお聞きする



中央上：岩穴の内部



右上：物語を話す渡辺競さん



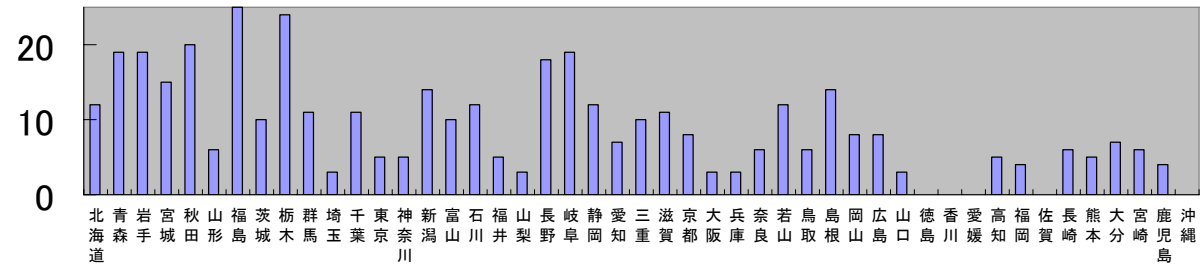
下：玉川太郎が投げた石の前で



ii. 蛇と名の付く土地

蛇喰村（じゃばみ）という地名が登場しました。蛇はあまり好かれない動物なので名前としてはあまり使われなような感じをあり、全国でどの位あるものか調べ表にしました。

（地図で見る日本地名索引より）



地名は重複するものがいくつかあるものの全国で414箇所ありました。

結果は意外に多く、特に東北地方に多いことがわかりました。

では、なぜこのように東北地方に多いのか考えてみました。

- ・ 山林が多く蛇が実際に多い。
 - ・ 蛇を崇拝し敬う文化がある。
 - ・ 蛇行といわれるように林道や大きな川など、地域に曲がりくねっている目立つものがある。
- などの意見が出ました。

実際にその名前の由来を調べてみると他に

- ・ 地滑りした地肌が蛇の鱗のような見た目であることから、地滑りを起こすような急斜面を持つ土地には（蛇・じゃ）が付く傾向があることが分かりました。

確かに、山菜や山の動物が物語に多く登場する背景には山の存在があるものと考えられます。では、その数々の物語が、山を持つ土地柄に影響よるものとする、地元でそびえる飯豊山そのものにも昔話があるかもしれない。と思い調べた結果、山岳信仰にまつわる話しは特に多いことがわかりました。

（飯豊山の山岳信仰より一部）

飯豊山にまつわる話
神代の頃、天照皇大神が天上を散歩し下界の風物を楽しんでいる時、かねてから豊葦原に（中の国）があると聞いた事を思い出し小手をかざして眺めて見たところ、それはそれは立派な国があるのでした。さっそくその国に保食神をつかわして、神の国から飯を出させて国を開きました。これが飯出、飯豊のはじまりと言われています。この神様は食物の祖神であって、主福神とも食稻魂神とも、また宇賀神とも御膳持若宇賀売命とも稻荷大明神ともいっております。飯豊山を中心にした土地は、米の多い国つまり米の沢と言うので、後の人々は米沢の国と名づけたそうです。 またこんな話もあります 昔、箱の口集落の獵人と、飯豊町高峰集落の獵人が飯豊山に獵に行きその美景と神秘さに心を引かれその地に神を祭ることにした。これをきっかけとして、飯豊山は山岳宗教の地として栄え、多くの参拝登山者が登った。この山は、女人禁制の靈山であり。飯豊山に参拝登山する人は、必ず21日間、毎朝水垢離をすることになっていた。（水垢離【みずごり】とは、朝きれいな川又は泉に行き、水を浴び身体を清める事）精進料理を食べ21日間は禁欲生活をつつしまなければなりません。そして21日間努めた者だけが、飯豊の御山に登ることが許されたと言われている。

箱の口の人と飯豊山

箱の口集落の人が、御山に登山するときは、御山を開いた人が箱の口の人という事から、21日間に及ぶ水垢離と禁欲生活がたった7日間で済み、かつ、精進料理はするが登山前には必ず、鰯（ニシン）の煮た物を食べる事になっていたという。

それは高い山に登る時には、体力をつけて登れと特別に神様からお告げがあり、箱の口集落だけの人達が、神様から許されていたという。

又、登山時に箱の口集落の人々がその一行に加われば絶対山は荒れないと言われていた。その他、箱の口集落の人が登山する時には必ず家に酒を作って登ったという。

そして、その人が登っているうちに家にいる人がその酒をあけてみると、不思議に、絶対この酒は失敗しないと言う。集落の人達はこれも農作神様のおかげだと言っていたそうである。

箱の口集落の人々が御山に登る時、必ず米を背負って行った。一行の中で疲れや、病気のため、倒れる者がいると、その人の頭に米をかける。その人はたちまち元気になり、一行に加わって登山できたという。

小松の人（川西町（隣町））と飯豊山

飯豊山の神は、小松のいやしい※母の腹から生まれるとともに山に登ったら、途中で母が死んで老母石になってしまった。という話があり、小松の人が登ると恋しさに雨風が起るという。

※いやしい・・・地位や身分の低い

地元には有名な霊峰飯豊（いいで）山系がそびえており、その山は（飯が豊か）の名の通り稲作には欠かせない保水の役割を果たし農業水の安定した供給を担ってくれる、昔からかけがえない存在であったのでしょうか。さらに、ダムもなかった当時は、雨が続き山の持つ保水能力を超えた時、その大きな山の抱える保水量は洪水という形で現れ、家や小屋を容易に飲みこみ、牛や鶏といった家畜が鳴きながら流されいく。そんな光景を目の当たりにした時、底知れぬ恐怖心があったのではないのでしょうか。水面に浮き、流される様々なものが鱗のように見え、水かさが倍にも増し泥水となり、蛇行しながら荒れ狂い流れるその光景を蛇の移動のように例えたのではないかと思います。

恐怖の話や感動する話、面白い話というのは良くも悪くも心に残ります。そして私達もそうですが、そんな話はどうしても人に話したくなるものです。しかも、より面白く、より怖く聞いてもらうためにいろいろ背景が加えられるはずです。大筋の話があり、それがその土地その土地で脚色されていったと思われます。

一方“大人との約束を守らないと〇〇になる、子どもたちだけで川で遊ぶと〇〇に襲われる”などという、子どもへの戒めや、注意をひき教え諭す為のシンボルとする意味もあったのかもしれない。結果、広大で自然溢れる山の麓の村では、豊かな生活・健全な家庭が営まれており、家族の手伝いをしながら、また囲炉裏を囲むなどして物語を話すことで世代の違う子どもや孫とのコミュニケーションもあった理想の家族像が確立していたのではないかと思います。

ストーリーを持たせることで文字として残さなくとも、話し（言葉）として伝えていくことができる。その上「教えられ、教える」ということを意識させないまま自然に伝わるというプロセスを持った、口承文化とは家族や地域の思いやりが詰まった素晴らしい伝承方法だと感じました。

(3) 現地調査

①関連深いもの

i. 越後街道（新潟では米沢街道と呼ぶ）

置賜（山形県）と越後（新潟県）を跨ぐ政治産業道・生活道として利用されていた。

以前は小国からのルートは（小国～古渡～田代峠～八ッ口～沼）だったが

この道が出来たことにより（小国～足野水～玉川～大里峠～沼）にルートが変更される。

この街道は峠が多く 13 もの峠を有していた為、13 峠と呼ばれている。明治 17 年ごろ県令三島通庸によって小国新道が開設されたことにより人々の生活から遠ざかり荒廃していった。

当時物流は米沢からは、たばこ・青そ・小豆・ぜんまい・わらび・栗などを移出し、越後からは乾物や塩魚、珍しいものでは石油などが移入されていた。

またイギリスの旅行家イザベラバード女史は、この越後街道を下越方面から置賜盆地へ通過した。当時の様子は著書「日本奥地紀行」の中で紹介されている。

ii. 大里（おおり）峠

大永元年（1521年）に伊達植宗が開いた羽越国境の峠。その後、越後街道が整備されることになる。大里峠は標高が487メートルで宇津峠に次ぐ難所とされ新潟と山形の県境に位置し、当時、その道中には【助け】と呼ばれる宿屋兼茶屋が営まれていた。その跡地が今でも存在する。

また、明治7年には畑集落から銅鉱が発見され明治35年に採鉱精錬が開始される。戦争によって銅の需要が急激に増え昭和9年には300人程が働いたが終戦を境に閉山となった。

山頂には大蛇伝説に基づいている地蔵堂があり大里大名神が合祀されている。大里峠という名前の由来は多く存在するが、大蛇伝説に関する一説では、大蛇さえ尾を折っていくほどの山道という意味から（尾折る→尾折り→おおり→大里）となったと言われている。

iii. 渡部邸

国の指定重要文化財とされている渡部邸は、財政難に苦しんでいた米沢藩に融資、幕末まで総額10万両以上を用立て、急迫の同藩財政を救った豪農であり豪商の大庄屋である。全盛期には75人の使用人がいたといい、1000町歩（約1000ヘクタール）の山林を経営し、700町歩（約700ヘクタール）の水田から約1万俵の小作米を収納したと伝えられる。

iv. 大里峠と渡部邸

大里峠には大里沢川に沿って古道がある。長雨時にはぬかるみも多くでき、荷の運搬等に支障をきたしたため、この普請は渡部本家にとって積年の計画であった。（大里峠以降の山形県側の一部の峠は米沢藩が藩の豪商や在郷有力者に人夫を供出させ敷石工事を実施した。）工事は1851年に始められ道幅6尺を3間に広げ、崩れた部分を切り開き、掘込み、道の左右に水流しの細掘を付けた。また長さ4尺・厚さ5寸の切石を2360枚を敷き詰めたこの事業に当時約5000人が携わった。とされている。

② 現地を歩く

i. 玉川太郎の投げた石と山賊が隠れた岩穴

2009年6月 2日 渡辺競さんに案内をしていただきました。

ii. 渡部邸

2009年6月23日

見学時には「平成の大修理工事」が行われており、床が外され土間がむき出しでした。大里峠の大蛇を退治しようと村人が集合し、鉄の杭を立てる計画を練ったと言われている母屋を見学し、ここの大黒柱はじめ各柱、天井の梁材は、ケヤキの巨木良材で組まれていることを教えてもらい、今回の工事で大黒柱の床下の部分が継ぎ足しされていたことが分かり関係者の方も驚いたことをお聞きしました。これから畳が敷き詰められると床下は一切見る事が出来なくなるということで本当にタイミングが良かったと思いました。普段は立入禁止の区間である2階から見下ろす、江戸時代中期京都より遠州流庭師を招き構築されたといわれる庭園は、現在の庭園と比べても豪華で、数々の草木が整然と植えられ、それらは丁寧に剪定されていました。藩にまで融資することのできる豪商と呼ばれた人たちの生活を顧みることが出来、今の時代に生まれていなかったらここには一生足を踏み入れることが出来なかっただろうと痛感しました。



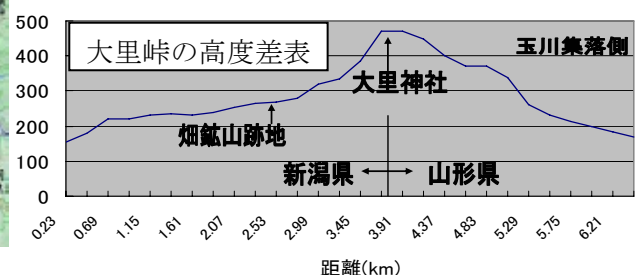
iii. 大里峠

2009年7月30日

行 程：学校～小国駅～越後片貝～

畑鉦山跡地～大里峠～大里神社～玉川集落～学校

渡部さんの案内で大里峠を歩きました。昔は山賊が隠れていた事を聞いた事もあり、うっそうと草木が茂る山道は少し不気味でした。途中、山ゆりが数多く咲き乱れている箇所や当時栄えていた畑鉦山の朽ち果てた外壁など。ここが生活道であった事を感じながらみんなと歩きました。ここはイザベラバードも歩いた道であることを聞き、どんな思いでこの風景を眺めていたのかと考えたりしました。結構険しいところもあり、ここが唯一の道とはいえ盲目であった、大蛇伝説に出てきたお坊さんが本当にここを歩けたのかとも思いました。旅をするそのお坊さんも実は、好奇心旺盛な冒険家だったのでしょう。頂上には事前に調べた通り神社があり、中を覗くとお地蔵様がそなえられていました。その前掛けは新しく、掛け替えてくれる人がいる事がわかり、その思いに少し嬉しくなりました。小雨の降る中でしたが皆で声を掛け合い、最後まで諦めず踏破することができました。



(国土地理院発行 5 万分の 1 地形図より)

(4) 紙芝居作成

これまで調べてきた物語を実際に読み聞かせをして、実演を披露したいと話し合いました。しかし、私たちは後藤さんのように1人で何役も演じられない。また、長い原稿もスムーズに話せない、等の意見がでて、【語り】ではなく【紙芝居】を作成する事にしました。

当初パソコンを使って「デジタル紙芝居」と称し、挑戦するつもりでしたが、初心者の私達が手探りで始めから行うには時間がなさ過ぎるという理由で通常の紙芝居で表現する事にしました。

① 紙芝居を作る

i. 脚本 (テーマを絞る)

作りたいテーマを絞る・登場人物の会話を考える・演じやすいストーリーにする。

ii. コマ絵 (展開のダミー作り)

紙芝居の展開のダミー作りをする＝「箱がき」・コマ絵で見て流れを検討する。

iii. ひな形

(画面の) 抜きの効果を検討する。

iv. 試演

ひな型の紙芝居を演じて見てもらい、感想を聞く。

V. 本書き

紙芝居のサイズの紙に本書きする。

② 紙芝居を演じる

i. 下読み

作品の組み立て方や、登場人物の性格や出来事などを掴む。

ii. 声 (せりふ・語り・擬音)

言い方次第で登場人物の心の動きや状況を観る人が感じるようにする手法を学ぶ。

- ・ 嬉しい時 (やや高めの声で明るく) 楽しい時 (明るくはずむように)
- ・ 怒っている時 (強く早口) 悲しい時 (弱く・ゆっくり) など

iii. 間 (ドラマを生かす)

- ・ 期待させる間・・・気持ちを誘い込む。
- ・ 余韻を残す間・・・情感を漂わせる。

iv. 抜く (動かす)

情景やテンポに応じて (普通・ゆっくり・はやく・さっと・途中でとめる) など

様々な紙芝居の手法を学ぶことが出来ました。幼稚園時代よく見た記憶がある紙芝居がこれほど奥深いとは思いませんでした。しかし計画する段階で時間がかかり思い通りに進めることが出来ませんでした。その間幼稚園が夏休みに入り、結果都合が合わず実演できませんでした。



4. 調査を終えて

毎年、夏に関川村では「たいしたもん蛇（じゃ）祭り」ということでギネスブックにも認定されている、わら細工の大蛇をかついで練り歩く祭りが行われます。（今年は8月28日～29日）実は地元ではその大蛇が洪水から守ってくれたということになっており、多大な損害を蒙った羽越水害（8月28日）の日にちなみ、その大蛇の全長を82.8メートルとしその教訓を忘れないようにしているそうです。

この大蛇、①今回調べた大里峠の大蛇と関係しているのか？②大蛇になった【おりの】の野望、大きな湖を造ろうとした事と、この洪水の話はつながっているのか？というところまで知りたかったのですが、そこまで及びませんでした。今後、その関係性も明らかにしたいと思いました。



今回の調査を通して蛇に関する話が多いという理由は、その容姿・動きが不気味であったがゆえに印象深く、また、何か神聖な存在を感じさせる部分があることが要因ではないかと思いました。好きや嫌いとはもかくとして、当時人は今以上に生活していく中で動物や自然（山の恵み）はとても身近な存在であったことがわかりました。環境整備がきちんとされている現在では野生動物は、昔ほど多く見られなくなってお聞きします。とても残念なことです。

小国は野生の動物が数多く存在する自然に恵まれた環境だと思います。しかしこれは人間のエゴが少しあるのかもしれないと感じました。それは、人間の生活の利便性を優先させた結果、動物たちの生活空間を限定してしまい、棲みかを追い出された動物達が今度は、温暖化による気候の変動でエサ場としていた場所を今再び追い出され、エサを求め人間の生活範囲まで侵入しトラブルをおこす。そしてそんな場合、必ず一方的に動物が侵入者とされ非難されてしまうからです。動物たちにとっては過酷な状況です。今回調べた話にも動物達が数多く登場しました。どの種も欠けてはなりません。そんな大切なこの生態系をこのまま維持し、後世に言い伝えられるように環境問題にも強い関心を示さなければいけないと感じました。

最後に、調査を初める前は、私達が居なくなっても人間が存在する以上、伝承文化は生き続けるものだ。と、さも他人ごとのように感じていたのですが、しかし、自分も実は中継人であり、人の思いやる気持ちがないと、簡単に消えてしまう事もある、本当はか弱い側面を持つ存在であることに気がつきました。

私たちができる事とは何か？今はまだ分かりませんが、今回調べていく中で学んだことを基盤とし、探求し続けていくことからまずは始めてみようと思いました。

今回の調査にご協力を頂いた関係者の皆様 ありがとうございます。